

## ベストクラス選定理由書

作成者：綿貫 克洋，岡本 郁子，仲村 海，武藤 彩夏，和田 千宙，傳法谷 肇，山中 一英

科目名称 文学と読解		(担当教員名： 児島 啓祐 )
課 程： 学部	開講時期： 前期	
授業形態： 講	授業規模： 30人以下	
インタビュー対象教員名 児島 啓祐 (実施日時： 令和5年8月4日(金)； 実施場所： 言語棟 230 )		
インタビュー対象受講者名 伊藤 みやび，作田 伶未 (実施日時： 令和5年8月7日(月)； 実施場所： オンライン )		
<p>〈選定理由〉</p> <p>「教職協働」と「学生参加」という兵庫教育大学におけるFD活動のポイントから、教員と学生が授業を作り上げていく様子が伺えるかどうかをA-1班の選定の基準とした。そこから、学生評価をもとに、学生の意見を聞いて授業を展開していることや、実技科目ではないのに深い学びを学生が得ていることから、上記の要件を満たしていると考え「文学と読解」をベストクラスに選定した。</p> <p>〈教員と学生のインタビューから〉</p> <p>教員と学生のインタビューを通して、①学生に合わせた授業づくり②学問の入り口としての授業③学生とのやりとりの三つのことについて述べる。①学生に合わせた授業づくりについてであるが、教員へのインタビューの際に、シラバスを頂いたが、第1回以外全て手書きで内容が書き換えられていた。その理由としては、受講している学生に合わせてシラバスを変更したため、当初の予定と大きく変更して授業を行っていたとのこと(ちなみに今年度の講義も昨年度の講義とは大きく異なり、留学生向きに変更しているようだ)。児島先生自身も「学生の解釈を楽しみたいし、学生たちにも楽しんでもらいたい」という思いがあり、その思いがシラバスを自然と予定調和させなかったのかもしれない。このような学生に応じたシラバスの変更は、授業に一体感を与え、学生たちも楽しんで授業に臨むことができただろう。</p> <p>②学問の入り口としての授業については児島先生は「目標」として、「学問の入り口であるので、大学の講義がどのようなものであるのかを体験して、実感できるようにしていた」と述べていた。実際、学生からのインタビューでは、「初めは難しく感じたが、高校とのつながりもあり、大学に入ってから授業にぴったりであった」という意見もあったので、児島先生が「目標」としていたことと、学生が感じたことが合致しているといえる。本講義は共通テストを終えて間もない大学1年生を対象とするため、これまでの学びを活かすことができるし、その知識を覆すような解釈に触れることができること、教科書通りの解釈をしなくても良いことも学生たちが「面白かった」とのべた理由の一つなのかもしれない。</p> <p>③学生とのやりとりについては、児島先生は改善点として「もう少し学生と関わる機会を設けたかった」と述べていたが、学生からは「先生も肯定的であり、意見も言いやすく雰囲気も良かった」という意見もあった。自分の意見を自由に表現する場が与えられていたと考えられる。また、講義後に提出する学びを記述したノートにも、先生からのフィードバックがあるため、「先生とのキャッチボールができていく感じが嬉しい」と学生は感じていた。このことから、児島先生が思っている以上に、学生は先生との関わりが大きく感じていたことが分かる。</p> <p>以上のことから、本授業をベストクラスに選定する。</p>		